

身近な所からもう一度考える

郡山市立緑ヶ丘中学校 1年 三坂 麗翔

僕の生活の中には、残念ながらいじめ問題は存在する。いじめは心を傷つけ破壊し、時には命までもうばってしまう。いじめを一言で表しているが、その内容も様々で、殴るけるといった暴力のいじめ。パシリにする万引させるなど強要するいじめ。悪口やののしったりする言葉のいじめ。他にも物を隠す壊す等もあるが、今、世の中で一番多いのは、「ネットを使ったいじめ」ではないだろうか。スマホや、タブレットが普及し、昔に比べると、僕達子供にとっても、身近になったインターネット。勉強や調べ事をするには便利で今やなくてはならない物となっている。しかし、一方でその便利性を悪く使う人も多く、とく名で参加出来る事や、直接顔が見えない事もあり、大人数で攻撃したり、何を言ってもいいという悪い風潮ができてしまっている。つい先日、他人に対して「死」と言う言葉を投げつける投稿が物議となった。実は僕もこの言葉を口にしてしまった事がある。小学生の頃担任の先生から、

「生活の中で、死ねという言葉を使っている」

と、母に連絡があった。その日帰ると母は一枚の紙を取りだした。母はその紙を少しづつ丸め、夜にはボールのように固くなっていた。何を作っているのか聞くと母はこう言った。

「妹が受けた暴力、いじめの傷だよ。家に勝ってからの間にバカ、アホ、死ねとかの言葉、時にはケンカして頭をたたいたりした。そんな事が続いて、心の中はどんどん傷ついて辛くなってこんなに小さくなった。」

と、僕は思わず目をそらした。少し考えて僕は妹に謝った。妹の目から涙があふれた。辛かったんだ。僕は何度も何度もごめんねと伝えた。妹は「いいよ」と許してくれた。その横で母が丸めた紙を少しずつ広げて言った。

「見て。ごめんねって謝ったら少しずつ心が開いた。少しずつ元気が戻った。でもこの心、しわくちゃで穴も開いている。分かる？一度傷ついた心は、何度謝っても何日何年たっても、ずっと傷ついたまま残り続ける。誤ったから大丈夫ではないんだよ。」

そう言われ、僕は胸がぐっとしめつけられ、涙があふれた。

この出来事以来僕は生活の中で、「相手の目を見る、話をよく聞く、心の中の紙を思い浮かべる」事を意識するようになった。相手の目を見る事で、いやだったうれしかったの様子が分かるようになった。話を聞く事で、どうしたいか？どんな事を考えているのかが分かるようになった。見る聞くだけで、相手の考えを理解し、自分の意見もきち

んと伝える事が出来るようになった。

インターネットが普及し、自分の周りでも携帯を持つ人が増えた今だからこそ、もう一度考え直す良い機会だと思った。自分が発した言葉や態度が、相手を傷つけてしまっているかもしれない事を、僕達はもっと気につけないといけないと思う。友達同士でやっているメールの中でも、他人の写真を勝手にのせたり、名前を出して笑い物にして広めたり。本人が見てない、気付いていないから大丈夫という考えも同じだ。された本人がいやだ苦痛だと感じた時点でそれはもういじめなのだ。

自分がされて辛い事、言われていやなことはしない。小さい頃から何度も教えてもらった事なのに、歳を重ねるにつれ、その場の楽しさや雰囲気流されて、大切な事を忘れかけている。僕はこの作文を通して、人の心の大切さをもう一度考え直す事ができた。そのチャンスをくれた環境にも、とても感謝している。人は、うらみ、にくしみを持って生きるより、愛する、感謝するという明るい気持ちをもって生きた方が、絶対幸せになれると思う。今、暗やみの中へ迷い込んでいる友達がいるならば、僕が助けたい。そして一緒に楽しい日々を、明るい未来を見続けていきたい。